
ナインイレブン もう一つの支店

koru.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナインイレブン もう一つの支店

【Nコード】

N5276T

【作者名】

koru.

【あらすじ】

”あなたのコンビニ”でお馴染みの『ナインイレブン』のとある支店の日常風景。

俺の勤めるのは”ナインイレブン”というコンビニエンスストアだ、全国展開されているから認知度は高いと思うのだが。

いくら知名度が高いコンビニだからといって、全部の支店が繁盛しているわけじゃないし、平和な地域に建っている支店もあれば、ウチのような…ちょっとばかりキケンな場所に建ってる店もあるわけ。

「らっしやいませー」

最初の”い”を抜かすのは最初に教育されたときからの風習だ、店長直々に指導があったのだから準じるしかあるまい…：意味はわからないが、気分とかそんなもんだらう、深く聞いてくれるな。

「らっしやいまっせー」

同僚の木村も、俺の声に少し遅れて棚の影から声をだす。

さて、ウチのコンビニの立地なのだがな、通称魔の三角地帯。神社、寺、墓地を3つの頂点にもつ三角形の丁度中央に位置している、更に入り口は北向き。

そんなわけで、かわったお客様が多数お見えになる。

大抵は実体すら無いまま入店ベルを鳴らし、すぐに裏口から帰られるのだが。

時々店内を暫し物色した後、いつの間にか居なかつたり。

中には常連さんもいるわけで。

「だからさあ、盛り塩なんて、イマドキはやらないわけよ？」

しっかりはつきり見えてますが、隣町にある高校の制服を着た彼女はれっきとした幽霊です。

「申し訳ございません、お客様。オーナーと店長のたつての希望で設置させていただいてますので、撤去はできないんですよー」
にこやかに応対している木村に拍手。

この時間帯のバイトのなり手は中々居ないのだが、あいつだけは長続きしてくれてる。

さすが、神社の息子はつええな。

店の隅に置かれた塩が気になるらしい彼女は、塩の前にしゃがみ込みまじまじと塩を観察しているが…お客様、パンツが見えてますよ。

それにしても、木村ん所の神主さんに拜んでもらった塩も駄目か。拜んでくれた神主さんも「まあ気休めにしかならないけど」とは言っていたけど、本当に気休めだったなあ（主に、オーナーと店長の）。

「バイト君、鼻の下が伸びているよ」

スーツをびしっと着た青年が、俺の立つレジカウンターにひじを突いて軽く寄りかかりながら、少し不機嫌そうに小声で注意してきた。

いかんいかん、あの魅惑の黒チエックに気をとられてしまっていた。

「失礼致しました。ところで、もうそろそろお帰りになられる時間かと思うのですが？」

そう常連である青年に告げると、青年は視線を転じて店内にある時計を見上げ、それから入り口のドアへと顔を向けた。

「まあいいじゃないか、どうせ客は誰も居ないんだし」

「……そうですね、この時間帯は、皆様悪寒がするからといって、店に近づきませんから」

来るのはよっぽど靈感がないか、トイレにかけこむ緊急事態な人間くらいだ。

青年は血の気の引いた薄めの唇を笑みの形に歪め、俺に視線を流してくる。

「そうだね、この時間ここに来るのは、よっぽど酔狂な客だ。ま

ず、地元の間人は来ないね」

そう言いながら俺に向けていた視線をすいっとドアに向ける。
なんだろう、やけにドアを気にしているようだ。

「僕らはね、この店が好きなんだよ」

視線をドアに向けたまま、青年は独り言のようにそう口にする。
いつのまにか、女子高生も立ち上がりドアを注視している。

木村が小走りに俺の居るカウンターまで近づいてきた、その表情は少し切迫しているように見え、手には店内に設置してあった2箇所分の盛り塩の小皿が載っている……なぜだ？

木村がカウンターに入った途端、突然ふわっと店内の密度が増した気がした。

……いや、気のせいじゃなく、増した。
人口密度じゃなく、幽霊密度だが。

流石にこの量を見るのは初めてで、圧倒されて腰が抜けて座り込みかけてしまった。

「大丈夫ですか、チーフ」

塩の盛られた皿をカウンターに置いた木村に支えられ、なんとかみつともなくへたり込まずに済んだが。

「ど、いうことですか……」

俺は木村に支えられたまま、スーツ姿の青年幽霊に呻くように声をかけた。

青年はカウンターから身を起こし、いつに無く凜々しい立ち姿でドアを睨みつけている。

「バイト君達はそこに居なさい」

低い穏やかな声が有無を言わさない強さで俺達に命じた。

果たして、ドアを開けて入ってきたのは……。

「…山伏……」

ぼそり、と木村の呟く声が耳に入った。

確かに山伏だ、厳いかつい顔、厳いかつい体、手には錫杖しやくじょうと数珠、額にはあの黒くて小さい帽子(?)…とにかく、あの修験者といわれている山伏だ。

山伏はドアを開け、中にひしめく幽霊達に臆することなく、その一歩を踏みしめた。

手にした錫杖を力強く鳴らし、数珠を振るい、俺にはわからない謎の呪文を唱えている。

「くあつ！」

ドアの近くに居た、ふよふよした霊(実体はないが、白いもやもやとして居る)が一声あげて、掻き消えてゆく。

「雑霊ちゃんがつ！」

女子高生が悲しみに満ちた声をあげ、涙の滲んだ目でキツと山伏を睨みつける。

途端、山伏の額に大粒の汗が浮かび表情も苦しそうなものになるが、山伏はその何らかの力に対抗するように声を張り上げ、じり、じり、つとすり足で店内に入ってくる。

その迫力に押されてか、霊達もじりじりと後退している。

緊張感の高まった店内では、蛍光灯が破裂し、窓ガラスにはヒビが入る、動揺している雑霊(?)が商品を掴んで縦横無尽に飛び回り……ポルターガイストのオンパレードだ。

「オン・キリキリ……」

山伏が汗まみれになりながら必死に呪文を唱えているが、店内に1メートル程入ったところから動けなくなっている。

「我等が憩いの場を乱すのはやめていただこう！ 我等はただ、この場で過ごすひと時を愛しているだけなのだから」

今までじつと動かずに居た青年が、無造作に左手を山伏へとかざした。

「ぐほおっ!!」

手を向けられた瞬間、山伏は何か巨大な力に押されたかのように店外まで吹っ飛んだ。

「あっちゃああ、やっぱり駄目だったみたいだねえ」

いつの間にか霊達も消えポルターガイストのせいで照明5割減の薄暗い店内、呆然としている俺達の耳に呑気な声が入る。

見れば、裏口から入ってきたオーナーが、散乱した商品をひよひよいと避けながらカウンターまでやってくるところだった。

「…オ、オーナー？」

オーナーはぐるりと店内を見回し、あっはっはー、と乾いた笑いを零し、くると俺達の方を向くと。

「特別手当出すから、片付けよろしくね!」

むさ苦しいオッサンのウインクなどいらなから……頼むからもう余計なことをしてくれるなど、俺と木村でつるし上げたのは、致し方のないことだと思う。

その後、翌々日には窓ガラスの張替えも終わり通常営業に戻った夜の店内には、やっぱりいつものように常連霊達じょうれんさんが来て、生身の客バイトが来ず暇を持て余す俺達を冷やかしていくのだった。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます

さて、”妄想部”の『ナインイレブン』はご存知ですか？ ええ！

？ まだご存知ありませんか！？

幽霊支店と同じオーナーが経営する支店で広がる人間模様をご覧ください
ただけます。

折角ですから是非ご覧ください

6人の作家が贈るオムニバス形式の作品達、一読の価値ありますよ。

妄想部へ <http://mypage.syosetu.com/144526/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5276t/>

ナインイレブン もう一つの支店

2011年6月1日19時25分発行